羽陽学園短期大学紀要　第９巻　第１号（通巻31号）2011年２月
Bull. of Uyo Gakuen College, Vol.9, No.1, February 2011

言葉で伝えるということ

－歌詞を手がかりにして－

柏　倉　弘　和　　幼児教育科

(2010年９月30日受理)

〔　要　　約　〕

本稿は、言葉による伝達について、どうしてうまく伝わらないのか、どうしたらしっかり伝えられるのかという点から考えようとするものである。

初めに伝わらない原因について、言葉の性質と伝達の仕組みという二つの視点から検討した。

次に、どうしたら伝えられるのか、歌詞の分析を手がかりとして考えた。

その結果、しっかり伝えるためには表現の仕方が重要である、という考えに至った。

Ⅰ．本稿の目的

人に何かを伝えることは難しい。自分の考えや想いを一生懸命伝えようとしたのに、うまく伝えられなかったという経験は誰にでもあるだろう。多くの場合、人は言葉で何かを伝えようとする。この「言葉で」というところに何か問題があるのであろうか。どうしてうまく伝えられないのか、どうしたらしっかり伝えられるのか、考察することが本稿の目的である。

Ⅱ．伝わらないということについて

この章では、人が人と顔を合わせて会話をしている場面において、なぜうまく伝わらないのか考察していく。伝わらない原因として筆者の考えをいくつか提示し、検討してみたい。

１．言葉自体の性質から

⑴記号

伝えたいこととは何だろうか。たとえどんな内容であっても、それは通常言葉で表される。では、その言葉を伝えたいのだろうか。そうではない。言葉を伝えるのではなく、言葉で伝えるのである。伝えたい内容そのものは頭の中にあって形がない。言葉で表すことによって形になり、伝えることが可能になる。言葉は伝えたい内容を表しているのであって、伝えたい内容そのものではない。つまり、言葉は記号である。記号とは、「あるものの代わりとしてそれを表わしている」[1] ものである。この言葉は記号であって、伝えたいことそのものではないということが、まず重要である。

言葉が記号であるということは、言葉で言っていることが本当かどうかはわからないということである。たとえば、ある男性がある女性に「愛してるよ。」と言ったとする。この言葉だけでは本当に愛してるかどうかは判断できない。愛を伝えることは特に難しいことである。なぜなら、愛には形がないし、どんなことを愛と呼ぶのか明確ではないからである。愛していなくても言葉だけならいくらでも「愛してる。」と言える。言葉はすべてそうである。言葉で言ったことが本当かどうかは、言葉だけでは判断できない。本当だと信じるかどうかは聞き手が自分で判断しなければならない。信じない場合は、いくら言っても伝わらないことになる。

⑵意味

言葉には意味があるが、それは固定的で明確なものとは言えない。言葉により違いはあるが、その意味は揺れていて変化すると捉えた方がよい。なぜなら、言葉の意味は、その言葉を使う人がその言葉と関わって持っている知識や体験と関係があるからである。「犬」という言葉を例にして、鈴木孝夫は次のように述べている。

> 以前に犬に咬まれたことのある人と、そうでない人では、「犬」ということばに対する気持がちがうだろうし、犬が大好きな人は、いろいろな種類の犬を見分けることも、性質のちがいを指摘することもできるが、犬に無関心な人にはこれはできない。
>
> しかしどちらの人も「犬」ということばを理解し、使うことができるという点では同じである。[2]

そして、次のように主張している。

> 私たちが、ある音声形態（具体的に言うならば、「犬」ということばの「イヌ」という音）との関

連で持っている体験および知識の総体が、そのことばの「意味」と呼ばれるものである。[3]

言葉の意味をこのように捉えると、「ことばの『意味』は、個人個人によって、非常に違っている。」[4] ということになる。これでは伝わるはずがない。伝えたいことを表している言葉、その意味がそもそも人によって違っているのだ。ただし、意味がすべて違っているわけではなく、共通して理解している部分もある。

「おもしろい」という言葉について考えてみよう。テレビで漫才を見ていたとする。人により好みがあるだろうが、多くの人が見て「おもしろい」と思う場合、滑稽であるという意味で共通していると捉えてよいであろう。

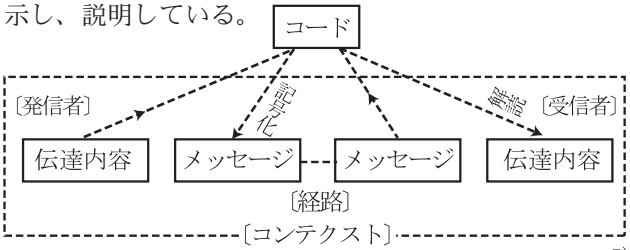
それに対し、本を読む場合はどうだろう。同じ本でも人によって「おもしろい」と思ったり思わなかったりするのではないか。読書によって得られるどんなことを「おもしろい」と捉えるかということについては、人によりずいぶん違いがあると考えられる。喜劇性を求める人、悲劇性を求める人、スリルとサスペンスを求める人、等々様々ではないだろうか。この場合は、漫才のように滑稽という意味で共通にくくることはできない。すなわち読書における「おもしろい」の意味は、人によって違っているのである。

問題なのは、言葉の意味が人によって違うことを普段、人は意識していないことではないだろうか。自分がおもしろいことは他の人にとってもおもしろいと思っていれば、一層言葉は通じなくなる。自分と相手との間には、言葉の意味の違いが必ず生じるためになかなか伝わらない。

ここまで述べてきた記号と意味に関することは、言葉を用いる限り逃れられない根源的な問題であると考えられる。

2．伝達の仕組みの中で

池上嘉彦は、伝達の仕組みについて次のような図を示し、説明している。



[5]

伝達内容は頭の中にある抽象的なものであるから、そのままでは相手に伝わらない。

何らかの方法でその存在を知覚できるようなものに直さなくてはならない。つまり、伝達するためには、思ったり感じたりしている事柄を表現する（文字通り、「表（おもて）に現わす」）ということが必要である。そのようにして表現されたものが「メッセージ」と呼ばれる。「メッセージ」は、もちろんただ相手に知覚されるというだけでは伝達の役を果せない。それは何かを意味していなくてはならない。つまり、何かを意味するもの、すなわち「記号」により構成されていなくてはなら[6]

ない。そして、

もし伝達の目的を正確に達成しようとするならば、メッセージを構成する記号とその意味は発信者が恣意的に定めるのではなくて、受信者との共通の了解に基づいた決まりに従っていなくてはならない。そのような決まりが「コード」と呼ばれるものである。[7]

会話をする場合を考えると、伝えたいことを言葉を用いて表現したものが発信者側のメッセージに該当し、文法や語彙等を含めた言葉の決まり全体がコードに該当する。話し手は、伝えたいことを言葉で表す際に言葉の決まりを活用しているわけである。そのメッセージを聞き手が受け取り、言葉の決まり（コード）を通して読み取ることになる。

この伝達の仕組みの中で、どんなことが伝わらない原因になっているのか考察していきたい。

⑴記号化の段階

人は、伝えたいことを言葉で表す時に、伝えたいことを残らず表現することができるのだろうか。どんな伝達内容であっても、完璧に表す（記号化する）ことは無理ではないかと考える。特に、言葉で表しにくいものは記号化が難しいであろう。

たとえば、音やにおい、味、気持ちなどである。何か料理を食べてそのおいしい味を伝えたいと思った時、何と言ったらよいのだろう。甘いとか辛いだけでは物足りないが、他の適切な言葉はなかなか思いつかないのではないか。柔らかい、さっぱりしている、まったりした、ジューシー等々、どういう言葉を用いても言い尽くせないのではあるまいか。味とは、様々な要素が複雑に絡み合って生まれるものであり、どうしても言葉では表現し切れない部分があるだろう。うれしい、悲しいなど気持ちを表す場合も同じように考えられる。

このように、伝達内容自体が複雑で話し手が十分に表すことが難しい場合は、完全な記号化はなおさら困難であろう。いずれにせよ、伝えたいことをもらさずにすべて記号化し、メッセージへと変えることは不可能ではないだろうか。伝えたいことをうまく言えなかったり、言いそびれたり、抜けたりすることが必ずあると考えてよいのではないか。

⑵解読の段階

聞き手（受信者）がメッセージの解読をする場合も、記号化の場合と同じように完璧に行うことは難しいのではないだろうか。前節で述べた、言葉で表しにくい音やにおい、味、気持ちなどは、話し手の伝えたいことをしっかり受け取ることに関しても相当難しいと考えられる。どんな内容であっても、相手が伝えたいことを少しももらさず受け取ることはやはり困難であろう。何かしら聞き落としたり、誤解したり、理解できなかったりということが必ずあるのではないか。

前述したように、伝達内容の記号化が完璧には行われないのだとしたら、解読する前のメッセージを受け取った時点で、すでに話し手の伝えたいことが多少なりとも欠落していることになる。初めから完全な解読を行える可能性はなくなっていると考えてよいだろう。

⑶コードの理解

前述したように記号化、解読どちらの段階においてもコードに従って行われるわけである。言葉を用いて伝えようとする場合のコードには、言葉の決まり全体が該当する。当然、この言葉の決まりに対する理解度が、記号化と解読の双方に関係する。話し手と聞き手のコードへの理解度が違えば、記号化と解読の間に違いが生じるのはもちろんである。たとえば、言葉の決まりがよくわかっていない話し手がいて、十分に記号化が行えず、伝えたい内容の50％しか表現できないとする。それを受け取った聞き手がいくら言葉の決まりをよく理解していたとしても、初めから50％しか表現されていないのでは、完璧に解読しても50％しか伝わらないわけである。80％の解読にとどまれば、伝わる内容はもっと減少する。

このようにコードに対する理解度が、伝えることに確かに関わっていると考えられる。

⑷コンテクスト

コンテクスト（文脈、場面）が伝達に影響を与えることは言うまでもない。記号化が不十分であってもコンテクストによって解読が可能になり、伝わることもあるし、言葉の意味がコンテクストによって変わってしまうことは、日常的によくあることである。

たとえば、夫が妻に「あれを取ってくれ。」と言ったとする。これだけでは「あれ」とは何のことかわからないが、コンテクストを考えることにより「あれ」が何を指しているかわかる場合がある。夫と妻が二人でテレビを見ていたとすると、「あれ」とはテレビのリモコンではないかと推測できる。夫が、朝、出勤しようと玄関で靴を履いていたとすれば、「あれ」の候補として、財布、ハンカチ、コート、帽子、定期券などが考えられる。このような場合は、コンテクストへの依存が大きい伝達と言えよう。コンテクストなしではほとんど伝わらない。

「バカな奴だ。」という言葉はどうだろうか。他人に対して面と向かって「バカ」と言うことは実際にはあまりないだろう。だが、たとえば、グライダーを作って空を飛ぼうとした青年がいたとする。残念ながらほとんど飛ばすに落ちてしまった姿を見て、その青年の友人が「バカな奴だ。」とつぶやいたとしたら、その「バカ」とは否定的な意味の「バカ」だろうか。空を飛びたいという夢に向かって挑戦したことへの賞賛や感嘆などが含まれているとも考えられるのではないだろうか。

もう一つ例をあげてみる。男性が女性に「君は僕の太陽だ。」と言ったとする。急にそんなことを言われたら女性は驚いたり、気味悪がったりして、まともに受け取ろうとはしないであろう。もし親しい男性からデート中に言われたとしたら話は違ってくる。この場合の「太陽」は、もちろん恒星である太陽そのものではなく、太陽のように輝いて美しく生命の根源であるとても大切な存在なんだということのたとえであるわけだが、そのことがしっかり伝わると考えられる。

以上述べてきたように、コンテクストは言葉の意味を決定したり、変えたり、伝達に深く関わっている。コンテクストを抜きにしては伝達は成立しない。が、コンテクストに法則はない。様々な場面・状況が考えられる。そういう複雑なコンテクストの捉え方は人によって違うであろう。コンテクストをしっかり捉えられない人にはうまく伝わらない場合がある。

⑸言っていることと思っていることが違う

前節で述べたコンテクストは、その場その場で異なる一回限りのものであるが、他にももっとややこしいことがある。三谷幸喜の言葉を借りれば、「言っていることと思っていることが違う。」[8]ということである。これは、言いまちがいとか思っていることをうまく言えないということではない。思っていることと違うことを言うのであり、もっと言えば、意識的に思ってもいないことを言うと考えてよいだろう。三谷も述べているが、人は日常生活の中でそういう行為をすることがよくあるのではないか。わざと思ってもいないことを言う、その理由は様々であり、その理由こそが肝心なのだ。

向田邦子の書いたシナリオの中に、人間の心の奥底を恐ろしいくらい赤裸々に描き出した「阿修羅のごとく」という傑作があるが、その中から例をあげてみよう。この作品の主要な登場人物は、皆すでに自立している20代から40代の四姉妹とその両親である。

第１話では、四姉妹の父親に愛人がいることが発覚

するのだが、そのことで二女巻子が長女綱子の家に相談しに行ったところ、姉は姉で愛人と一緒に玄関に出てきたのを見て動転し、後も見ずにバス停に駆けて行く。そして、追いかけてきた姉と言い合いになる。

巻子「何よ。」
綱子「話あるのよ。」
巻子「私は話なんかないのよ。」
綱子「戻ってよ。」
巻子「急ぐのよ。」
綱子「いいから。」[9)]

この後、綱子が引きずるようにして巻子を自分の家へ連れていくのだが、本当は巻子は、綱子にききたいこと言いたいことはたくさんあったに違いない。しかし、何もきこうとはしない。そこに巻子の複雑な心境がうかがえる。

同じく第１話の中だが、四女の咲子に呼ばれて母親が彼女の恋人に初めて会うシーンがある。恋人は無名のボクサーなのだが、こんなことを母親は言うのである。

「大変なご商売でございますね。」
「あの、ぶたれますと痛いんでしょうね。」[10)]

このようなどうでもいいようなことばかり言い、暮らしていけるのかとかものになるのかとか、けがしたらどうするのとか正式に結婚するのかというような本当にききたいことは、何一つきかないのである。突然のことで驚いているだろうし、初対面でいろいろきくのも悪いと思ったかもしれない。母親の心の中では、様々な思いが渦を巻いていたことだろう。とにかく核心に触れることは一つもきかないというところに、母親の真意が隠れているのでないか。

人はいつも思っていることばかり言っているわけではない。思ってもいないこと、思っていることと正反対のことを言うこともある。それは、伝えるという点から考えれば非常に読み取りにくく面倒なものかもしれない。しかし、そうしないではいられない気持ちになることもあるのだ。複雑かつ微妙であるが、すこぶる人間的であるとも言えよう。

以上、この項で考察してきた伝わらない原因は、まとめると記号化も解読も完璧にはできないことと言ってよいだろう。

Ⅲ．どうすれば伝えられるか

１．歌詞について

筆者が担当している「文学」の授業の中で、歌詞を材料として取り上げることがある。歌詞を見ながら実際にその曲を聞くのだが、学生の反応が非常にいい。集中してよく聞いている。提出された感想においても好意的、肯定的な内容がほとんどである。「歌詞を見ながら聞くと、普段見ないで聞いている時よりも歌い手の想いがよく伝わってくる気がする。」、「見ながら聞くと歌詞についていろいろ気づいたことがあり、いい歌詞だなと改めて思った。」、「歌詞を見て聞いたらその曲が一層好きになった。」というような内容である。とにかく歌詞はほとんどの学生にしっかり伝わっていると思われる。

どうして歌詞はよく伝わるのであろうか。どんな歌詞でもというわけではないが、たくさんのいろいろな歌詞が多くの人の心に届いているようである。不思議なのは、決して特別な言葉ではなく、ごく平凡な言葉で書かれた歌詞であっても、聞く人の心を引きつける、ということである。歌詞が伝わる訳を探ってみたい。そのことが、会話においてどうすればしっかり伝えられるのか考える手がかりになるのではないか。授業で扱った歌詞の中から印象に残っているものをいくつか取り上げて分析し、考えていきたい。

２．歌詞の分析

⑴「硝子の少年」　　作詞：松本隆　作曲：山下達郎

雨が踊るバス・ストップ
君は誰かに抱かれ
立ちすくむぼくのこと見ない振りした

指に光る指環
そんな小さな宝石で
未来ごと売り渡す君が哀しい

ぼくの心はひび割れたビー玉さ
のぞき込めば君が
逆さまに映る

Stay with me
硝子の少年時代の
破片が胸へと突き刺さる
舗道の空き缶蹴とばし
バスの窓の君に
背を向ける

映画館の椅子で
キスを夢中でしたね
くちびるがはれるほど囁きあった

絹のような髪に
ぼくの知らないコロン
振られると予感したよそゆきの街

嘘をつくとき瞬きをする癖が
遠く離れてゆく
愛を教えてた

Stay with me
硝子の少年時代を
想い出たちだけ横切るよ
痛みがあるから輝く
蒼い日々がきらり
駆けぬける

ぼくの心はひび割れたビー玉さ
のぞき込めば君が
逆さまに映る

Stay with me
硝子の少年時代を
想い出たちだけ横切るよ
痛みがあるから輝く
蒼い日々がきらり

Stay with me
硝子の少年時代の
破片が胸へと突き刺さる
何かが終わってはじまる
雲が切れてぼくを
照らし出す
君だけを
愛してた

歌詞が全体として強く印象づけられる感じがする。まず、雨、バス・ストップ、指環、宝石、ビー玉、硝子、バス、窓、映画館、キス、くちびる、絹、コロン、街、雲というようなイメージがはっきりしている名詞が多用されている。そのため、詞に描かれている内容が映像になってくっきりと浮かび上がってくるようである。

次に、冒頭の「雨が踊る」や「想い出たちだけ横切るよ」、「蒼い日々がきらり駆けぬける」という擬人法や、「ぼくの心はひび割れたビー玉さ」や「硝子の少年時代」、「絹のような髪」という比喩が使われているが、この通り比喩表現が非常に多い。比喩とは何かにたとえて表すわけだが、初めに述べた名詞の多用と同じようにイメージをはっきりさせ、印象を強める働きがある。例をあげれば、心をひび割れたビー玉に、少年時代を硝子にたとえているが、この比喩は、なかなか思いつかないとてもすぐれた表現だと思う。日常では実際には使えない表現と言ってもいいかもしれない。特に、「ぼくの心はひび割れたビー玉さ」はすばらしい。「ひび割れたビー玉」は、もちろん恋が実らなかった失意を表しているのだろうが、ビー玉で遊んだ世代である筆者にとっては、ビー玉は懐かしいおもちゃであり、少年時代の象徴でもある。そのビー玉がひび割れたということは、少年時代が終わりを迎えたことも感じさせる。少年の繊細さや傷つきやすさをよく表していて見事である。「想い出たちだけ横切るよ」と「蒼い日々がきらり駆けぬける」という擬人法と合わせて、誰しも経験し、通り過ぎていく少年時代の照れ臭い、甘美なそしてどこか現実離れしたところのある感覚をとてもよく表現していると思う。

イメージが明瞭な名詞や比喩表現の多用が効果を上げていると感じるが、日常ではあまり言わない現実離れした表現も多い。たとえば、「くちびるがはれるほど囁きあった」がそうである。実際にはありえない誇張した表現と言えるだろう。

この歌詞全体としては、日常では使わないような比喩や大げさな表現が、歌詞の内容や曲にぴったり合っていて、一つの独自な歌の世界を見事に構築しているのではないだろうか。その世界に聞き手は引き込まれるのであろう。

⑵「抱きしめたい」　作詞：桜井和寿　作曲：桜井和寿

出会った日と　同じように
霧雨けむる　静かな夜
目を閉じれば　浮かんでくる
あの日のままの二人

人波で溢れた
街のショウウィンドウ
見とれた君が　ふいに
つまずいた　その時
受け止めた　両手のぬくもりが　今でも

抱きしめたい　溢れるほどの
想いが　こぼれてしまう前に
二人だけの　夢を胸に
歩いてゆこう
終わった恋の心の傷跡は　僕にあずけて

キャンドルを　灯すように
そっと二人　育ててきた
形のない　この想いは
今はもう　消えはしない

震えそうな夜に
声をひそめ　君と
指切りした　あの約束
忘れてやしないよ
心配しないで
君だけを　見ている

もしも　君が　泣きたい位に
傷つき　肩を落とす時には
誰よりも素敵な　笑顔を
探しに行こう

全てのことを　受け止めて行きたい
ずっと二人で
抱きしめたい　溢れるほどの
君への想いが　込みあげてく
どんな時も　君と肩をならべて

歩いていける
もしも君が　さみしい時には
いつも僕が　そばにいるから

ロマンティックでファンタジーを思わせるような雰囲気を持った歌詞である。言葉一つ一つを見ると普段言わないような特別なものはなく、平易な言葉ばかりなのだが、フレーズになると印象が違ってくる。

この詞の最も特徴的な部分は、サビのところであると思う。

抱きしめたい　溢れるほどの
想いが　こぼれてしまう前に
二人だけの　夢を胸に
歩いてゆこう
終わった恋の心の傷跡は　僕にあずけて

最初のサビの部分である。いきなり「抱きしめたい」と始まるが、これは日常ではなかなか言えない言葉であろう。ストレートすぎて恥ずかしくなるようだ。歌詞として曲の中でだから言えるのだと思う。その後に続く「溢れるほどの想いが～（中略）～僕にあずけて」も「僕」の「君」に対する愛情、優しさ、思いやりが十分に感じられて、魅力的な表現だとは思うが、きざな感じがして実際に言うとしたら抵抗があるのではないか。これも歌詞ならではの表現と言えるだろう。

後に出てくる２回目、３回目のサビの歌詞も同じように考えられる。「誰よりも素敵な　笑顔を　探しに行こう」、「全てのことを　受け止めて行きたい　ずっと二人で」、「どんな時も　君と肩をならべて　歩いていける」という言葉を実際に言えるだろうか。もちろん絶対言えないということはないだろう。言える場面、言わなければならない局面もあるかもしれない。だが、日常的に気軽に言うのは無理ではないか。一つ一つの言葉は平易でも、フレーズとしては照れ臭くて言えない。現実離れした表現と言ってよいだろう。

⑶「らいおんハート」

作詞：野島伸司：コモリタ ミノル

君はいつも僕の薬箱さ
どんな風に僕を癒してくれる

笑うそばから　ほら　その笑顔
泣いたら　やっぱりね　涙するんだね

ありきたりな恋　どうかしてるかな

君を守るため　そのために生まれてきたんだ
あきれるほどに　そうさ　そばにいてあげる
眠った横顔　震えるこの胸　Lion Heart

いつか　もし子供が生まれたら
世界で二番目にスキだと話そう

君もやがてきっと巡り合う
君のママに出会った　僕のようにね
見せかけの恋に　嘘かさねた過去

失ったものは　みんなみんな埋めてあげる
この僕に愛を教えてくれたぬくもり
変わらない朝は　小さなその胸　Angel Heart

見せかけの恋に　嘘かさねた過去

失ったものは　みんなみんな埋めてあげる
この僕に愛を教えてくれたぬくもり
君を守るため　そのために生まれてきたんだ
あきれるほどに　そうさ　そばにいてあげる
眠った横顔　震えるこの胸　Lion Heart

この歌詞の特徴は、個性的な表現にある。「君はいつも僕の薬箱さ」、「いつか　もし子供が生まれたら世界で二番目にスキだと話そう」という表現は、非常に独創的でインパクトがある。めったに考えつかないユニークで素敵な表現であると思う。特に後者は、創造性に富んだ発想である。日常においてこのような表現はまず思いつかないであろう。

前述した「抱きしめたい」と同じような、言葉は平

易だがフレーズになると輝きが違ってくる表現もある。「君を守るため　そのために生まれてきたんだ　あきれるほどに　そうさ　そばにいてあげる」、「失ったものは　みんなみんな埋めてあげる」がそうである。心の中で思うことはあっても、照れ臭くて実際に言うのは難しいだろう。

この歌詞は、独創的でユニークな表現、思ってはいてもなかなか言えないような表現が、聞き手の心をとらえるのではないか。

⑷「うらみ・ます」

作詞：中島みゆき　作曲：中島みゆき

うらみますうらみます
あたしやさしくなんかないもの
うらみますいいやつだと
思われなくていいもの

泣いてるのはあたし一人
あんたになんか泣かせない
ふられたての女くらいだましやすいものは
ないんだってね
あんた誰と賭(か)けていたの
あたしの心はいくらだったの
うらみますうらみます
あんたのこと死ぬまで

雨が降る雨が降る
笑う声のかなたから
雨が降る雨が降る
あんたの顔が見えない

ドアに爪で書いてゆくわ
やさしくされて唯うれしかったと
あんた誰と賭けていたの
あたしの心はいくらだったの
うらみますうらみます
あんたのこと死ぬまで

ふられたての女くらいおとしやすいものは
ないんだってね
ドアに爪で書いてゆくわ
やさしくされて唯うれしかったと
うらみますうらみます
あんたのこと死ぬまで
うらみますうらみます
あんたのこと死ぬまで

冒頭の「うらみますうらみます」は、強烈なインパクトがある。この言葉を日常において実際に人に対して言うことは、ほとんどないであろう。安易な気持ちでは言えない。うっかり言ってしまったら大変なことになる恐い言葉である。これくらい強力な負のエネルギーを持った言葉「うらみます」が、この曲の中では11回（曲名も加えれば12回）も使われている。二連目からは「うらみますうらみます」に「あんたのこと死ぬまで」と続く。あまりにもストレートすぎて圧倒される。こうまで言われて動揺しない人間はいないだろう。めったなことでは言えない言葉だと思う。心の中で思ったりつぶやいたりするくらいか。

加えて、中島みゆきの歌い方が鬼気迫るようですごい。泣きながら歌っているような何とも言えない深い情念を込めて歌っている。哀しみや強い想いが切々と伝わってくる。メロディなどはもはや眼中になく、気持ちをそのままぶつけているような歌唱である。大きな強いエネルギーを感じる。聞き手は衝撃を受けずにはいられないのではあるまいか。

⑸「海を見ていた午後」

作詞：荒井由実　作曲：荒井由実

あなたを思い出す　この店に来るたび
坂を上って　きょうもひとり来てしまった
山手のドルフィンは　静かなレストラン
晴れた午後には　遠く三浦岬も見える

ソーダ水の中を　貨物船がとおる
小さなアワも恋のように消えていった

あのとき目の前で　思い切り泣けたら
今頃二人　ここで海を見ていたはず
窓にほほをよせて　カモメを追いかける
そんなあなたが　今も見える　テーブルごしに

紙ナプキンには　インクがにじむから
忘れないでって　やっと書いた遠いあの日

まるでドラマの一場面を思わせるような歌詞である。この場の雰囲気、晴れた午後の空気、この詞に登場する人物の切ない気持ち等が、臨場感たっぷりに伝わってくる。

「ソーダ水の中を　貨物船がとおる」とはすごい表現である。レストランの窓いっぱいに広がる海、横切っていく貨物船。それをソーダ水のグラスを通して見ているわけだが、文学的で繊細な表現だ。もう一つ「紙ナプキンには　インクがにじむから　忘れない

でって　やっと書いた遠いあの日」もすばらしい。辛い苦しいこの人物の気持ちが痛いほど伝わってくる。

この二つの表現は、ありそうでないような行為を見事に描写している、現実とは少しずれている歌の中だけの非日常的世界を表していると思う。聞き手は、その場に居合わせたかのような気分に浸っているのではないだろうか。

３．考察

前項の分析をまとめると、歌詞の中には日常では実際には言わないような表現が多く見られる、と言えるのではないだろうか。いろいろな表現があったが、以下に整理して記してみる。

○誇張した表現
（例）「くちびるがはれるほど囁きあった」
○ストレートすぎて恥ずかしくなる表現
（例）「抱きしめたい」
○照れ臭い表現
（例）「君を守るため そのために生まれてきたんだ」
○独創的でユニークな表現
（例）「つか　もし子供が生まれたら　世界で二番目にスキだと話そう」
○非日常的世界を表す表現
（例）「ソーダ水の中を　貨物船がとおる」
○強烈なインパクトのある表現
（例）「うらみますうらみます　あんたのこと死ぬまで」
○印象を強める表現
（例）「ぼくの心はひび割れたビー玉さ」

このような日常ではなかなか言わないような表現が、なぜ歌詞の中にはたくさんあるのだろう。それは、歌詞が歌うものだからではないか。歌詞は音楽と結びついて表現されるものである。メロディに乗って表されると、大げさな表現や照れ臭い表現等もその大げさだとか照れ臭いという特徴が緩和され、違和感を感じなくなるのではあるまいか。

考えてみれば、古来より言葉にはメロディがつきものであった。祭りの時のはやし声（ワッショイワッショイ等）。僧侶がお経を読む時の独特の節回し。応援する時の掛け声（フレーフレー等）。赤ちゃんをあやす時（イナイイナイバー等）。等々。どれも独特の節や言い回しがある。言葉と音楽は、元々相性がいいと考えられる。音楽が伴うことで、日常ではあまり使われない表現もその非現実性が和らげられるのではないだろうか。それだけではない。印象を強めたり、強烈なインパクトを感じさせたり、独創的であったり、そのような表現の特徴が、音楽と結びつくことで一層強くなるのではないか。歌詞における表現上の工夫が、音楽によってより効果を増し、豊かな表現になる。だから、歌詞は聞く人によく伝わるのではあるまいか。

前章で述べたように、言葉で伝えることを困難にするいくつかの原因が考えられた。それを乗り越え、しっかり伝えるためにはどうしたらいいのか。歌詞がよく伝わるということを手がかりにして考えてみたい。

歌詞が伝わるのは詞と音楽が一体になっているからだと考えられる。メロディに乗せて歌うことで、現実離れした表現も違和感がなくなり、伝える力が増した。歌うということは、非常に特徴のある表現の仕方の一つと言っていいだろう。つまり、しっかり伝えるためには言葉そのものよりもその言葉をどう表現するかが大切なのではないか。そうだとすれば、平易な言葉でも曲の中では伝える力が強まったことも納得がいく。我々は、普段、何と言おうか言葉を選ぶことにだけ神経を使い、どういうふうに言ったらいいか、言い方についてはおろそかにしてはいないだろうか。

それは、言葉の持つ意味だけを重視する態度と言えるだろう。それでは伝えることを困難にする原因を解決できない。意味だけを頼りにするのではなく、言葉をどのように表すか、表現の仕方を考えることが重要なのだ。前章において、伝わらない原因を記号化も解読も完璧にはできないこととまとめたが、その不十分な部分を表現の仕方によって補えるのではないかと考える。たとえ平凡な言葉であってもそれをどのように表すか考えることによって、しっかりと伝えられるのではないだろうか。

しっかり伝えるためには、もっと言葉の言い方を考えなければならない。

引用文献

１）池上嘉彦：『記号論への招待』岩波新書，1984，p67
２）鈴木孝夫：『ことばと文化』岩波新書，1979，p91
３）同上，p92
４）同上，p92
５）前出：『記号論への招待』，p39
６）同上，p38，p39
７）同上，p39
８）三谷幸喜：「三谷幸喜のありふれた生活　445」，朝日新聞2009年２月28日付け朝刊，第30面
９）「阿修羅のごとく」演出　早坂暁，ＮＨＫ　1998
10）同上

SUMMARY

Hirokazu KASHIKURA :

Communication with Language
— From Poetry —

The purpose of this study is to consider communication with language from how to communicate enough each other.

At first it was analyzed some reason not to communicate from the viewpoint of quality of language and structure of communication.

Then, it was examined from good communication with an analysis of poetry.

In result, it was shown that it is important how to talk to people for communicating enough.

(Uyo Gakuen College)